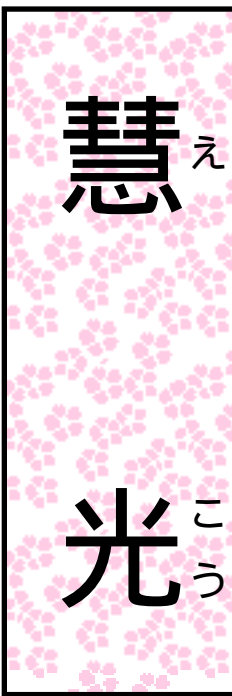




梅雨の晴れ間の日光浴

(6月5日・境内にて)



金光寺寺報
第144号
発行所 金光寺
宮崎県西臼杵郡
五ヶ瀬町大字鞍岡
5927番地
0982
83-2338

今月のことば

ぶつち ぐどん
仏智に照らされて 初めて 愚鈍の身と知らされる
(信國 淳)

親鸞聖人のお手紙のなかに、法然聖人からいただいたお言葉として、「浄土宗の人は患者になりて往生す」(『親鸞聖人御消息集』『注釈版聖典』771頁)と記されています。患者であるこの私が、患者のまま往生させていただくことが示されています。そのお手紙のなかには、「さかさかしきひと」という表現があり、それは「いかにも賢明なようにふるまうひと」という意味になります。み教えを聞いて、学んで、「賢明な」人、つまり、賢者になるというのではなく、むしろ、患者である私自身に気づかされることの大切さを、しっかりと見据えるべきであるということでしょう。

愚かであるよりも賢くあることを願うのが、私たちが持っているいわば普通の価値観だと思います。しかし、み教えを聞けば聞くほど、患者であ

る私が見えてきて、ちょっとした知識を身につけて賢者になったかのように錯覚してしまう、大きな愚かさのなかにどっぷりと浸かっている私がいることを学ばせていただくのだと思います。阿弥陀さまのはたらきをいただいて日暮らしを続ける私たちは、患者であり、愚鈍である自身のありのままの姿に気づかされます。それは言い訳でもあきらめでもなく、自身を厳しく問うていく、誠に厳しい眼をいただくということだと思います。「どうせ愚鈍だから」と言い訳するのではなく、愚鈍の身の私だからこそ、阿弥陀さまは決して見捨てずに私にかかりきりになり、その愚鈍を治療する必要もなく、「そのまま」愚鈍の身で往生させていただくんだと味わっております。

(本願寺出版社刊「大乘」誌より転載)

金光寺よろずコーナー



5月15日、秋岡孝徳さんご夫妻の長女未希子さん(みきこさん・4月14日誕生)が初参式でお参りされました。当日はご両親、お兄ちゃん、おばあさんに連れられてのお参り。これからは仏の子としてすくすく、そして大きく育ててほしいものです。

五月、金光寺ご門徒の次の方がご往生なさいました。謹んでお悔やみ申し上げます。
2013年 5月28日寂 満91歳
長 峯 那 須 稔 様

ホームページ開いています。
URL <http://konkhoji.jp>
6月5日現在 入室者数 35,277人

先日、申し訳ないような出来事がありました。私の最近の通常の朝の行動は、起きたら五時五十分に梵鐘を撞き、県道の落ち葉を掃くという順番になっていきます。ところが、たまたま、早く目が覚めたため、県道の落ち葉掃除を先にし、早く終わつたのでいったん家に入りました。時間が来たら梵鐘を撞こうと思つていたので、新聞を読んでいたら梵鐘のことがすつかり頭から抜け落ち、時計を見ると六時半になっていました。さすがに恥ずかしくて梵鐘を撞くことができませんでした。ご門徒の皆さんに普段「鐘撞き大変ね」と声をかけていただいたり、気遣いをしていただいているのに、翌日から、早く起きても行動の順番を変えないようにしました。といつても年齢を重ね、年をとりましたので目覚めが早く、仕方がないのでいつも起きる時間まで布団のなかでむずむずしてしまいます。一日の貴重な時間、もつたいたないなと思うのですが、ご指導をお待ちしております。
(住職 松井卓郎)

住職ひとりごと

仏教用語豆辞典

供養

戦没者供養塔、遭難者供養塔、殉難者供養塔から、カイコやフグなどの供養塔、さらに針供養、茶筌供養、人形供養など、わが国にはいろいろな供養がありま

す。このように、供養は死者などの霊を慰めることの意味で、一般に用いられています。「供養」は古代インドの言葉で「ブー・ジャーナ」といい「尊敬する」「崇拜する」という意味です。それが仏・法・僧の三宝、つまり仏教教団に対して衣服・食物・薬品・財物などを捧げ、尊敬すべき対象を養うことになりました。供養とは進供・資養の意味だといふのがそれで、いろいろ種類があります。バラモン教が動物の犠牲によ

る儀式であるのに対し、仏教は不殺生の立場から採用したものとわわれています。そして、礼拝の対象へ水、華、香、灯火などを供えることとなり、やがて、現在のようになりになりました。お彼岸です。大谷本廟も大賑わいです。よく見ると、みな、水、華、香、灯火を手にお墓参りしていますね。(本願寺出版社発行「仏教用語豆辞典」から)

人生最後の儀式

早い梅雨入りをしたのに雨が降りませんね。昨日四日、所用で熊本市に行きましたが、気温三十度を超え真夏日でした。水不足で稲作に困っている所もあります。大雨はいやですけど、そこそこに雨が欲しいものです。

五月二十九日、朝日新聞の朝刊第二社会面に「違う宗派で葬儀」提訴という記事がありました。僧侶という立場上ついつい気になり読んでみると、次のような内容でした。

宗派の異なる僧侶によって通夜や葬儀をされ、精神的な損害を受けたとして、福岡市の男性の遺族三人が二十八日、手配をした市内の葬儀社を相手取り、三百五十万円の損害賠償を求め訴訟を福岡地裁に起こした。「故人を弔い、遺族の心を癒す

という利益が侵害された」と主張している。

訴状や男性の母親などによると、男性は闘病生活の末、今年四月初旬、二十五歳で亡くなった。母親は昨年十二月ごろから、葬儀社に、もし男性が無くなった場合は浄土真宗本願寺派の様式で葬儀を営みたいとの意向を伝えた。亡くなった当日も、本願寺派による葬儀を依頼した。

母親によると、通夜と葬儀が営まれた後、母親が僧侶の指示で、茶や水を供える仏具を買いに専門店に行ったところ、「その仏具は、浄土真宗では使われない」と言われ、別の宗派だったことがわかったという。調べたところ真言宗だった、と訴えている。

ということですよ。

都会では、菩提寺の僧侶に頼ってもらえないような場合、遺族からの依頼を受けて葬儀社が僧侶を手配をしますが、今回のように宗派を指定しているのに、違う宗派の僧侶により葬儀が行われたということは驚きといつかあきれました。

さらに朝日新聞の記事には次のようなものもありました。

僧侶がお経を唱える様子が不慣れで、遺族が不審に思い、葬儀社から寺の名前や住所を聞いて調べたが、その住所に寺はな



かった。

最近の葬儀事情をうかがうと、「直葬」といって通夜葬儀を行わず、直接火葬を行ったり、葬儀をせずに身近な人が集まり「偲ぶ会」といったものを行うというのが増えているようです。

今回の新聞記事のケースと併せ、「直葬」「偲ぶ会」などを考えるに、自分が亡くなった後、どのような形で自分の人生最後の儀式が行われるか、いや、行つて欲しいか、亡くなってからでは指示はできません。命の縁あるうちに身近な人とよく話し合い、人生最後の儀式について決めておく必要があると感じます。

私は長年お育てをいただいた阿弥陀さま、南無阿弥陀仏のお念仏による浄土真宗本願寺派の儀式で人生最後のご縁にしてくれと、みなさんに言っていたかったです。

法語の世界

〈原文〉

同行のまへにてはよろこぶものなり、これ名聞なり。信のうへは一人居てよろこぶ法なり。

(蓮如上人御一代記聞書 百五十四)

〈現代語訳〉

念仏の仲間がいる前だけで、ご法義を喜んでいる人たちがいるが、これは世間の評判を気にしてのものである。信心をいただいたなら、ただ一人いるときも、喜びの心が湧きおこってくるものである。

仏事お休みのお知らせ

下記の日はお葬式以外の仏事は行いません。ご協力ください。

記

- 6月 22日・23日 終日 日終日 専用(高家用務)
- 28日 専用(親戚用務)
- 29日 午前 専用(親戚用務)
- 29日 午後 女性の集い準備
- 30日 高千穂組 仏教女性の集い
- 7月 29日、30日 専用(高家用務)
- 8月 2日 高千穂組仏教夏季講座
- 24日~25日 専用(大学用務・京都市)
- 9月 7日、8日 専用(高家用務)

第六十三回高千穂組仏教夏季講座のお知らせ

期日 八月二日(金) 午前九時

場所 高千穂町向山教願寺

講師 熊本教区山鹿組 常法寺住職

浄土真宗本願寺派布教使

佐々木 高 彰 師

持参品 念珠・門徒式章・経本・筆記用具

参加を希望される方は金光寺(電話 八三二二三八)までご連絡ください。(募集人員九名になり次第締め切ります)